

VI 水稲糯「ミコトモチ」の特性と栽培上のポイント

1 来歴

1987年に島根県農業試験場(現 島根県農業技術センター)において、「山陰糯83号」を母、「中部糯57号(ココノエモチ)」を父として人工交配により育成した。「ヤシロモチ」が「山陰糯83号」の母親にあたる。

2 特性

- 出穂期は8月中旬、成熟期は9月下旬～10月上旬の早生種である。
- 草型は“中間型”で、「ヤシロモチ」に比べて稈長が短く、穂数がやや多い。粒着密度は“やや疎”、脱粒性は“難”である。
- 芒の多少・長短は“中・中”である。ふ先色及び芒の色は出穂後には“うすい赤色”で、次第に色が濃くなり、成熟期には“褐色”になる。
- 耐倒伏性は“中”で「ヤシロモチ」より強い。
- 穂発芽性は“中”で「ヤシロモチ」より穂発芽しにくい。
- 葉いもち抵抗性は“やや弱”、穂いもち抵抗性は“中”、白葉枯病抵抗性は“中”である。
- 収量性は「ヤシロモチ」並みで比較的高い。
- 玄米の粒形は「ヤシロモチ」と同程度、粒大は“大”で「ヤシロモチ」よりやや大きい。
- 玄米の外観品質は「ヤシロモチ」よりやや優れる。
- 餅の食味は「ヤシロモチ」並みに良好で、餅は白く外観が良い。

3 適地及び栽培上の注意

(1) 栽培適地

栽培は胴切米の被害回避のため、標高200m以下の平坦から中山間地帯とする。

また、朝夕が山陰となるような日照条件の悪い地帯での栽培は避ける。

(2) 栽培上の注意

移植時期は、胴切米の原因となる出穂後の低温を避けるため、5月上～中旬植とする。

葉いもち抵抗性がやや弱いため、適切な防除を行う。

4 栽培管理のポイント

(1) 土づくり

堆肥等有機物や土づくり資材の施用、深耕、稲わらの腐熟促進対策を励行する。

(2) 育苗

- ・種子更新は毎年行う。
- ・浸種は積算水温で60～80℃を目安とする。水温が10℃以下にならないよう工夫する。

- ・ 催芽は30～32℃で24時間程度を目安とし、ハト胸状態を確認する。
- ・ 1箱当たりの播種量は乾燥種籾重120～150gとする。

(3) 移植

- ・ 移植適期は5月上旬～中旬である。このとき、平年の出穂期は8月中旬、成熟期は9月下旬～10月上旬となる。
- ・ 栽植密度18.5株/㎡（株間18cm、条間30cm）、1株植付本数3～4本を基準とする。

(4) 肥培管理

- ・ 基肥：窒素分量で3～4kg/10a。
 - ・ 中間追肥：7月上旬に葉色がうすい場合、窒素分量で1kg/10a程度を施用。
 - ・ 穂肥：出穂20日前と10日前に、それぞれ窒素分量で1.5～2kg/10aを施用。
- ※倒伏防止のため、多肥栽培は避ける。

第2表 窒素施用量（Nkg/10a：上段）と施用時期（出穂前日数：下段）の目安

| 基肥 | 中間追肥 | 穂肥 | | 計 |
|-----|-------------|--------------|--------------|-----|
| | | 1回目 | 2回目 | |
| 3～4 | (1) 7月上旬 | 1.5～2 20日 | 1.5～2 10日 | 6～9 |

() は7月上旬に葉色がうすい場合に施用する。

(5) 水管理

- ・ 倒伏防止のため中干しを徹底する。
- ・ 品質向上のため出穂後30日程度は間断灌水を行う。
- ・ その他、基本的な水管理を励行する。

(6) 病虫害防除

- ・ いもち病抵抗性は強くないので、適切な防除を行う。

(7) 刈取

- ・ 穂発芽、胴割粒の発生を防止するため、適期刈取を励行する。
- ・ 刈取は青味籾率10～15%を基準とする。

(8) 乾燥・調製

- ・ 乾燥は仕上がり水分15%とする。
- ・ ミコトモチは大粒のためライスグレーダー網目は2.0mmを用い調製を行う。